

## 立川断層帯横ずれの可能性

# 地震への影響 明言避ける

### 東大地震研 「調査積み上げる段階」

文部科学省が進める立川断層帯の重点的調査観測に参加している東京大学地震研究所の石山達也助教は6日の現地説明会で、従来推定されていた立川断層の付近に、活動を繰り返してきた形跡のある断層帯を初めて確認したと発表した。確認された断層を調べた結果、縦ずれ断層ではなく横ずれ断層の可能性が高いことが分かった。同研究所は8、9の両日、現場を公開し、これまでの調査結果について説明する。

が、見つかった断層帯はほぼ垂直で、横ずれ断層の可能性が高いという。

しかし、この結果が、推定される地震の規模や間隔にどう影響を与えるのかはまだわからない。「今は基本的な調査を積み上げていく段階で、活断層としての評価は調査終了後、政府の地震調査委員会で検討されることになる」と話す。同研究所は今後、断層調査用の起震車を使って地下構造の探査などを行う。

東大地震研究所などは6日、マグニチュード7・4の地震が想定される立川断層帯(東京都、埼玉県)について、東京都武蔵村山市で実施している掘削調査の現場を報道陣に公開した。写真、中居広起撮影。断層を横から見ると、角度はほぼ垂直だったことから、従来考えられていた縦にずれるタイプ(逆断層)ではなく、「横ずれ型」の可能性が高いと同大はみている。

同大は、断層のずれ方などが特定できれば、現在の揺れの想定が変更される可能性もある、としている。

### あす、あさって一般公開

石山助教によると、立川断層帯はこれまで、断層の北(逆断層)だとされていた

立川断層帯 名栗断層と立川断層から構成され、埼玉県飯能市から青梅市、立川市を通り府中市にいたる長さ33キロの断層帯。主部をなす立川断層(長さ20キロ)は、近い将来に活動する恐れがあるとされるが、市街地を通っているため、調査が進んでいなかった。地震調査委員会は、2011年の東日本大震災の発生により大地震発生の確率が高まった活断層の一つとして

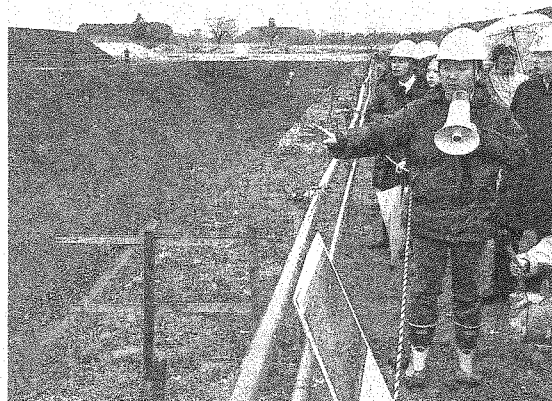
立川断層帯は、断層の形状について不明な点が多く、いつ、どのくらいの間隔で活動していたのか十分な資料がなかった。首都圏にあり、想定震源域が人口密集地に位置することから、地震の規模や起こりやすさを予測するため、そうした基礎資料の収集が課題となっている。

今回の調査観測は、今年

## 立川断層帯「横ずれ型」の可能性

東大地震研

揺れ想定変更も  
った可能性があるとしている。同大などは、今後約2年をかけて、過去に断層が活動した時期などを調査する。



ぼ真ん中に位置する武蔵村山市の私有地に、長さ750メートル、幅30メートル、深さ10メートルの調査溝(トレンチ)を掘り、露出した断層や地層の構造、形成された時期などから過去の地震の時期を推定する調査を行っている。

一般公開は午前10時から午後3時。受け付けは午後2時まで。雨天中止。入場者多数の場合は、入場を制限し、公開を打ち切ることもある。場所は、真如苑プロジェクト用地(武蔵村山市榎1の17)。西武拝島線・武蔵砂川駅より徒歩17分、立川バス・大南1丁目停留所よりすぐ。問い合わせは、クレアリア地質部(03・50959・2536)。